

探訪 北の風景 ⑬

若者の手で活性化を目指す 岩見沢複合駅舎前の商店街

岩見沢市
萩本和之

グッドデザイン大賞など数々の賞に輝いた岩見沢複合駅舎と、隣接した最先端ICTセンター。しかし、駅前商店街は、ご多分に漏れずいまひとつ客足が伸びない。その打開策で地元や札幌、小樽などの大学生ら若者の力を活用している。

JR岩見沢駅は1882年（明治15年）ごろ本道開拓のけん引役、石炭輸送のために開業。そして、岩見沢が空知管内の行政や農業の拠点となるとともに、バス交通の要所としても発展してきた。

しかし、石炭産業の衰退などに伴い、駅前商店街は往時のにぎわいを失い、さらに3代目駅舎が



2000年12月10日に全焼した。

この逆境をばねにして、09年にJR駅舎は公共施設との複合駅舎として蘇生した。外観は赤茶色のれんがで、駅前広場に面した正面はガラス張り造り。れんがには、出資購入者477人の名前などが刻まれ、窓枠は古い鉄道レールを活用したモダンなデザイン。国内外の15以上の著名なコンテストで最高賞などに選ばれ、市民の誇りだ。

複合駅舎の東隣りの5階建てビルには、中央バス岩見沢ターミナル（1996年移設）が併設されている。ビル内には「コミュニティプラザ」（95年開設、「自治体ネットワークセンター」（97年開設）が入居している。

自治体ネットワークは市内の教育施設や医療・福祉施設、主要公共施設などを光ファイバーで結び、さらに衛星通信とも結合されている。学校での双方向遠隔学習システムや電子図書館をはじめ、医療面での「遠隔画像診断システム」や農業分野での利活用も担っている。この計画を強力に推進したのは日浦正博氏。08年、市経済部長で死亡。当時は先駆的な最先端施設で全国的にも有名だった。またプラザにコミュニティFM「はまなす」（96年開局）もあり、市民に身近な情報をきめ細かく発信している。



フリーペーパー「ゆあみ」の取材、編集に係わった森村さん。就業体験をきっかけで札幌から岩見沢へ移住して起業。商店街からは活性化へのキーパーソンとして期待されている＝オフィス森村提供

だが、こうした取り組みでも駅前商店街の活性化への決め手とはならず、市は1999年に「中心市街地活性化基本計画」を策定、コンパクトシティ（集約型都市）を目指している。

商店街振興組合連合会はイベントなどで集客に力を入れているほか、大学生を対象にしたインターンシップ（就業体験）を4年前から実施している。商店での職業体験を通じて、商店街の魅力や問題をチェックしてもらい、後継者育成や若者の定着化の方策を探る狙い。この間約40人が参加した。

その一人が森村優佳さん。森村さんは札幌生まれで、北星大学在学中の12年から2回就業体験に応募。翌年から女性向けのフリーペーパー「ゆあみ」の取材、編集にも携わり、本年2月までに計



正面はガラス張り造りで明るく、しゃれたデザインの岩見沢複合駅舎。左隣のビルは屋上にパラボラアンテナを設置している「自治体ネットワークセンター・コミュニティプラザ」ビル。バスセンターも併設されている



市民らが思いを込めて自分の名前などを記している複合駅舎の赤レンガ。市民運動として177人が出資、応募した。国内外のコンテストでも高い評価を受けた

9号、3千部前後発行してきた。「ゆあみ」は学生ら若い女性が自らの感性をもとに自分の足で商店街をルポ。「昼間の歩行者の6割は女性ということもあり、発刊後直ぐに無くなるほどの人気」(市経済部の谷口正行中心市街地推進室係長)という。岩見沢にほれ込んだ森村さんは昨年、オフィスを起業。いま若者目線で商店街の後継者対策事業を担当するほか、イベントの運営や、「ゆあみ」を超えた新たな雑誌を、と意欲を燃やしている。複合駅舎内に道教大岩見沢分校が09年に地域、市民との連携基地として「i-BOX」を開設するなど駅前商店街では若者とのコラボは活発だ。

へはきもと かずゆき・大学非常勤講師